

ザンストラ先生のこと

宮本正太郎*

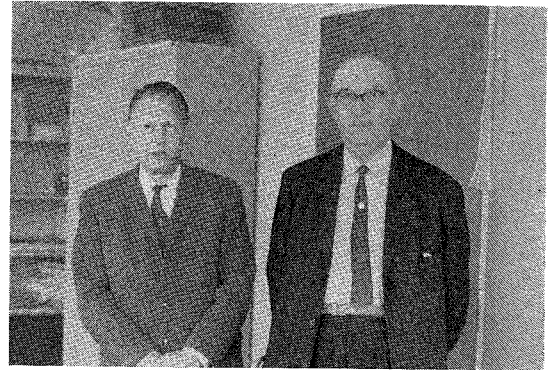
THE CONSTRUCTION OF REALITY. 1962年ペルガモン出版の哲学書である。英語で書かれた本ではあるが、私には読んでも判らない。しかし天文学に全く縁がないわけではない。この本の著者は天体物理学の大先生である Herman Zanstra 先生。そのザンストラ先生は今年10月2日77歳で急逝された。

ザンストラ先生の最も有名な仕事は惑星状星雲の中心星温度の決定についての研究であろう。プリンスプルは簡単明瞭である。星雲スペクトルの輝線は中心星星外輻射の転化したものである。したがって、星雲の輝線と中心星の連続スペクトルの強度比を測れば、それは中心星の星外輻射と可視輻射との比を知ることになり、直ちに中心星の温度が求められる。中心星の温度を知ることが惑星状星雲研究の根本問題である。

ほんとうに秀れた研究というものは誰にでもよく判り、しかも問題の核心をついている。私は学生の頃、ザンストラ先生の論文を読んで、本当の研究というものがあるのか、目が覚めたような気がした。先生の論文を繰返し読んでゆくたびに、立派な絵や音楽に接した時におとらない感動を覚えたことを思い出す。立派な文章というものは、テクニクだけでは書けるものではない。やはり、あふれるばかりの内容があってはじめて人を感動させることができるものであろう。

のちになって、私は禁制線の強度比から星雲の電子温度を求める論文を書いたことがある。書き終わってよく考えてみたところ、私の手口はザンストラ先生のプリンスプルの借用であることに気がつき、がっかりした。

最初に紹介した本は哲学の本で、1959~1960年にミンガン大学で講義されたものである。先生の学問の幅の広さはその経歴をみてもわかる。デルフトで化学工業の学位を得られ、ついでミネソタ大学で理論物理の学位をとってられる。その後ドイツに渡って天文学をはじめ、アムステルダム大学の天体物理の教授になられた。この研究所の現所長 D. クールブルッドさんはザンストラ先生の弟子である。天文分野の研究も、天体力学、相対論、宇宙線、太陽物理学、星雲スペクトルと広い範囲に涉っている。引退後、アメリカに渡って哲学の講義をして著書を残してられることは、すでにのべた通りである。この本をいただいた時、とびらに「未見の友へ」



第1図 クールブルッドさん(左)とザンストラ先生(右), 1970年撮影

と書いてあった。

先生は哲学者だからというわけでもあるまいが、国際会議にはほとんど出席されなかったから、お目にかかる機会もなかった。一昔前、写真を一枚いただきたいと手紙でお願いしたが、送っては下さらなかった。それから3年もたって、この事を私も忘れた頃、突然写真がとどいた。あとで、これはクールブルッドさんの撮したものとわかった。3年間も先生の心の片隅にひっかかりをつくったことを相すまなく思っている。つづいて、引退される時には、先生の通学された中学校の写真をいただいた。それは運河に沿うた、古い、典型的なオランダの建物の写真であった。

1970年夏、ブライトンの総会のあと、アムステルダムに立寄った。それは、クールブルッドさんがザンストラ先生に会わせてやろうということだったからである。お目にかかるのはこれが最初で、しかも今となっては最終となってしまった。先生は独身で、姪御さん以外に肉親はなく、アムステルダムの西方にあるハーレムの町の養老院で一人静かに暮らしていられた。

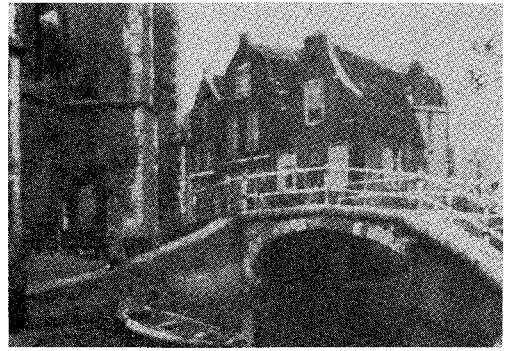
先生はわざわざアムステルダムの研究所まで出てきて下さった。明るい感じの、血色のよい方であった。会うとすぐ「これからは未見の友へ」と書かなくてもよくなったねとの挨拶であった。大先生の前へ出て、クールブルッドさんがかしまっている様子もほほえましかった。先生は一人で陽気に話されたが、その内容は哲学に関するもので、私には理解しにくかった。ただ、「人間の心というものの自主性」ということを非常に大切に考

* 花山天文台

えていられることだけは判った。

おひるになって、街のレストランに揃って出かけた。私が、ザンストラという名前から想像して、インドかインドネシアから来た学者かと思っていましたと無知なことを言うと、お前のところの「ナンバ」という名前は「ザンバ」とよく似ているのですぐ覚えたと答えられた。難波君には気の毒なような話である。昔の話もいろいろ出たが、その中で先生は、私の電子温度の研究が戦中戦後のドサクサで埋れてしまったのは気の毒であったとってなぐさめ、かつ激励して下さいました。私自身、近頃は惑星のことで頭が一杯で、古い事は忘れていたが、昔を思い出し、先生が知っていて下さった事を何よりも光栄に思った。食事を終って別れるとき、クールブルドさんをおしとめて、自分で支払をして下さったことも有難く、忘れられない思い出になった。

哲学の論文の別刷を送っていただくたびに、判らないながらも先生の御健在を思い、安心していたのであるが、今年の夏いただいた別刷の封筒の字が少しふるえていたので気になっていた。



第2図 先生の郷里デルフトの街の風景

先生の亡くなられた第一報はクールブルドさんから、続いてユトレヒトの難波君から詳しい手紙がとどいた。心臓マヒで突然亡くなられたため、翌日まで誰も気がつかなかったそうである。先年ミネルト先生が逝かれ、今またザンストラ先生が亡くなられた。お二人とも真に天才的なオランダの巨星であった。天文学者の場合、巨星は地におちるのではなく、天に昇るのである。

雑 報

新・小島彗星 (1972j) の発見

愛知県一色町の小島信久氏は、1972年11月1日4時02分から4時20分(日本時)まで、ジャコビニ・ジンナー彗星 (1972d) の観測のために撮影した乾板上に別の移動する彗星状の星像を発見し、11月1日23時ごろ東京天文台に連絡された。東京天文台では、直ちに確認のための手配をしたが、高知市の関勉氏が同じ星野をほとんど同時刻に撮影されていて、小島氏からの依頼で乾板を精しく調べ指摘の場所にその星像を確認されていることを知った。翌11月2日朝の小島氏の写真観測によって移

動が確認されたので、東京天文台では I.A.U. の天文電報中央局へ、新・小島彗星として連絡した。中央局からは、小島彗星として登録されたことを示す電報が折返えしとどけられた。東京天文台堂平観測所でも2日朝撮影したペーカールカメラのフィルム上で、約12等のこの彗星を確認した。その後関氏から別記のような精測位置の連絡を頂いた。小島氏の発見時刻と発見位置は下記の通りで、使用望遠鏡は口径31.5cm、焦点距離151cmの写真用反射鏡である。なおこの彗星は小島氏にとっては、1970年12月28日に発見された周期5.9年の周期彗星 (1970r) に次いで2個目にあたり、いずれも光度14等でアマチュアの発見としては記録的に暗いものである。

新・小島彗星は1972年中で通算10個目にあたり、日本人の発見した彗星としては、1971年3月7日の鳥羽彗星 (1971a) 以来1年8カ月目、通算32個目である。

小島氏の観測

U.T.	α (1950.0)	δ (1950.0)	m_1	m_2
1972年10月31.79931	08 ^h 23.4 ^m	-18°52'	14	15
11月1.73958	08 22.1	-19 02	14	15

関氏の観測

U.T.	α (1950.0)	δ (1950.0)	m_1	m_2
1972年10月31.84166	08 ^h 23 ^m 21 ^s .6	-18°52'23"	13.5	15
11月1.80278	08 22 07 .04	-19 02 29.7	13.5	15
11月1.81667	08 22 05 .95	-19 02 38.7	13.5	15

(香西洋樹)